

円珍『法華論記』の引用文献

——「先覚」と「慈恩」「進公」——

前 川 健 一

円珍の『法華論記』（以下『論記』）は、世親の『法華論（妙法蓮華経憂婆提舍）』の注釈書であるか、注釈にあたつて多数の文献が引用されており、その中には従来未詳であつたものも少なくない。本稿では、それらの重要なものの二点について解明し、関連する問題の考察を行いたい。

一 「先覚」

『論記』は一五ヶ所で「先覚」なるものに言及しており、これが誰のどのような学説であるかは以前より問題となつていた。これについては、『論記』巻第五に「東春續曰」として「故先覺會二用吉藏義耳」（智全上二五〇b）という文が引用されていることが手掛かりになる。これは東春（智度）の『法華義續』の原文では「故慈恩會二用吉藏義耳」（卅統藏（台湾版）四五・四六七a）となつており、円珍が「慈恩（すなわち基）」を「先覚」に改めたと考えられる。そこで、「先覚」の

ものとして引用される説と基の『法華玄贊』（以下『玄贊』）とを対照してみると以下のようになり、「先覚」が基であることは明らかである。⁽¹⁾

『論記』先覚云。就法器有二。一真。二仮。真即舍利弗等。仮謂増上慢者（智全上二四〇a）

『玄贊』法器有二。一真。二仮。真即舍利弗等。仮謂増上慢者（大正三四・七〇三b c）

天台宗の円珍が法相宗の基を「先覚」と呼ぶのはかなり奇異な感じを与えるが、これは『論記』と『玄贊』との密接な関係を考えれば、必ずしも不自然ではない。

『論記』では、「先覚」（二五例）のほか、「慈恩」（二例）「基」（五例）「他」（二三例）「或」（九例）「有（人）」（八例）「人」（二例）などとして、また特に引用であることを示さずに（二一例）、おびただしい数の引用・言及が『玄贊』についてなされている。それらを合計した『玄贊』の引用・言及は六四ヶ

所にのぼり、私に数えたところでは、『法華文句』二八五、『法華文句記』二〇七、『法華經』一四三、智度『法華疏義續』八一に次ぐ頻度である。円珍が『論記』の述作にあたつて『玄賛』を絶えず参照したことは明らかであり、「先覚」との呼称もこのような事実をふまえてのものと考えられる。

二 「慈恩」と「進公」

「慈恩」と言えば、慈恩大師こと法相宗の基を指すのが一般的であり、『論記』にもその例がある。しかし、『論記』では以下のように「基」と「慈恩」とを区別しているように見られる場合がある。

基公曰、『進財行以為供。有所撰資名養。修謹曰恭。崇仰曰敬。敬甚曰尊。尊深曰重。是理談美曰讚。触事論德曰歎。慈恩曰、『如是病人饒多則知医師。必善四衆困邊則表仏徳尊高。資益於仏目之為養。』（養字去声）小人奉上為養。大人育小為養。上声呼之。讚猶不足又稱揚者。肇師曰。形敬不足以写心。故復讚詠之。如説七言之偈者。大哉大悟大聖主。無垢無染無所著。天人象馬調御師。道風徳香薫一切。等云云。（已上兩文任取捨之）（智全上五三 a）

この中で「基公曰……」は『玄賛』（大正三四・六七七 a）に見いだせるが、「慈恩曰……」は見いだすことができない。以下の文によると、この「慈恩」は吉蔵の『法華義疏』（以下『義疏』）の注釈書であると考えられる。

今私更引吉疏云、『三根於持經用勝具得三品。乃至余三用劣。但得中下二品』（『義疏』（大正三四・六一四 c）に対応）者。慈恩、釈曰、『総明六根作用優劣不同。如眼觀見。後闌前明。左右傍觀。三分闕一。功德不全。故唯八百。耳用則勝……功德円満千二百。鼻根嗅聞通出入……闕於一分。鼻唯八百。舌能宣揚世出世法……舌根功德円満千二百。身根覺触……功用不全。唯得八百。意能默容世出世法……所以意根一千二百』云云（已上文）（智全上三〇二 a）

先の箇所についても『義疏』と対照すると以下のようになり「慈恩」が『義疏』の注釈書であることが分かる。

『義疏』困邊者。釈論云。大衆、困繞、則使、仏、徳、益、尊。既尊其人必受其道故明困邊。（中略）天華香等名之為供。資養於仏、目之為養。（中略）美其実徳為讚。讚、猶、未、足、又、稱、揚、之、曰、歎。（中略）彼經云。以天香等供養。大莊嚴王菩薩合手恭敬尊重。如説七言、偈、歎、仏、謂、讚歎也（大正三四・四六七 a）『論記』慈恩曰。如是病人饒多則知医師。必善四衆困邊則表仏徳尊高。資益於仏目之為養。（中略）讚、猶、未、足、又、稱、揚、者。肇師曰（中略）。如説七言之偈者。大哉大悟大聖主。無垢無染無所著。（中略）云云（智全上五三 a）

このような『義疏』の注釈書とみなされる「慈恩」は八ヶ所に見いだされる。同様に『義疏』の注釈書と考えられるものとして「進公」なるものからの引用がある。

『義疏』菩薩摩訶薩者。（中略）旧名道士。其言最勝。而即世学張李之道本名治頭及鬼卒。後盜取仏法道士之名也（大正三四・四六

1 a)

『論記』進公曰。即世学張李之道者。張謂張道陵。善能治人頭痛。李謂李伯陽。善能策疫鬼神。故曰鬼卒也(智全上二六b。他に智全上二二b~二aが大正三四・四五八a~九aに対応)

円珍は道進の『法華經鈔』を将来しているが、『東域伝灯目録』(大正五五・一一四九a、c)によれば、これは吉藏の『義疏』の注釈書であり、かつ道進の著作以外に『義疏』の注釈書は知られていないので、「進公」および「慈恩」は道進である可能性が高いと言えよう。

「慈恩」「進公」を参照した箇所は合わせて一〇ヶ所になるが、『義疏』そのものからの引用は七ヶ所に見られるのみであり、しかもいづれも短く取意的なものである。

『論記』の述作は、一般に尊通の『智証大師年譜』(智全下二三八六a、八八b)に従って、第一稿が円珍在唐中の大中八(八五四)年七月に著され、離唐直前的大中一二年一月九日に改稿された(ただし未完)とされている。一方、円珍の将来目録を調べると『智証大師請来目録』(大中二年五月一日記)にいたって初めて吉藏の『義疏』が記載されており、それ以前には同書を手することはできなかったと考えられる。このような経緯をふまえると、『義疏』からの引用は実は「慈恩」「進公」(おそらくは『法華經鈔』)からの又引きである可能性もあると言えよう。

なお、詳細については『インド哲学仏教学研究』(東京大学インド哲学仏教学研究室)第三号掲載予定の拙稿を参照していただきたい。

※智全『智証大師全集』

- 1 その他の箇所は以下の通り(智全上の頁数/対応する『玄賛』大正三四の頁数) 11b/667b、31a/672b、92a/682c、98a/688a~b、120a/689c、149b/706b、151b/707a、167a/710c、211a/800a、225b/816c、258b/828b、295b/834a、302b~3a/837b、303a/838a
- 2 その他の箇所は以下の通り(智全上の頁数/対応する『義疏』大正三四の頁数) 133a/487c、139b/488a、167a~b/498b~3、196b~7a/568b、270b/603b。なお、智全上319b~20bには直接対応する箇所がない。

〈キーワード〉『法華論記』、道進、『法華經鈔』

(東京大学大学院)